「日々の理科」（第 2291 号）　2020,10,20

「残念な植物」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

私の山荘には、非常に特殊なバードテーブル（野鳥の餌台）がある。

右端の窓際にあるのがそのバードテーブルだ。普通のバードテーブルは、台の上に餌が置いてあるだけだ。これだと、あっという間になくなってしまい、リス（ニホンリス）に根こそぎ持って行かれてしまうこともある。しかしこのバードテーブルは、搭状の容器に餌のヒマワリの種がたくさん入っていて、下部の小さな穴から小鳥が１個ずつ引っ張り出すので、一度餌を補給すると、一ヶ月以上持つ。

野鳥がヒマワリの種をくわえて、バードテーブルの止まり木にとまると、自動的に撮影するカメラも設置されている。撮影された画像は、ＦＴＰ経由でサーバーに保管、遠隔地からも観察できるように設定されている。

しかし、小鳥は必ずしも全部を食べずに、裏の森のあちこちにヒマワリの種をまき散らす。それが冬を前にして、次々と発芽してしまうのだ。

私は、飼料用のヒマワリの種子は、発芽しないと思っていた。しかし意外にも発芽率が良く、日曜日に森の中を探したら、100 本以上発芽していた。

しかし、早朝は 5℃以下になる今の季節、「発芽の三条件」は辛うじて揃っているのだろうが、「成長の条件」には乏しい。ほとんどの芽はひょろひょろと伸びて、本葉を出す前に地面に萎えてしまう。まさに「残念な植物」である。